



思考への探求

校内研究だより

令和7年9月26日

No.3

— 挑む力 —

学ぶこと・考えることを楽しむ

全教科で育てる「言葉の力」

～失敗をおそれず 自ら学びを進める子どもの育成～

2025年9月22日、本年度第3回校内研究として、宮崎教諭（2年1組担任）と堀野教諭（算数少人数）による算数科の公開授業が実施された。今年度の研究テーマは「学ぶこと・考えることを楽しむ全教科で育てる『言葉の力』～失敗を恐れず自ら学びを進める子どもの育成～」である。

「言葉の力」を育む授業実践

低学年で行われた「かけざん」の授業では、3の段の九九を題材に、気づいたことを記入して交流する活動が行われた。これまでに学習した2の段・5の段との関連をふまえながら、子どもたちは「数の増え方の規則性」や「答えに現れる特徴」に注目し、自分なりの発見を言葉にして表していた。九九を単なる暗記にとどめず、既習の知識と結びつけて考えることで、子どもたちの思考の広がりが見られた。

中学年で行われた「直方体と立方体」の授業では、シルエットを手掛かりに「どちらの立体か」を当てるゲームを通して、立方体と直方体の特徴を捉える活動が展開された。

「見える面の形」に着目させることで、子どもたちは自然と立体の違いを言葉で説明しようとしていた。互いの考えを比べ合う中で、立方体と直方体への理解が深まっていった。



研究協議会での評価と課題

研究協議会では、宮崎教諭の授業で使っていたワークシートや、堀野教諭の授業で見られたシークレットに写す道具など児童が取り組みやすいものを取り入れていたところが高く評価された。一方で、これまでの積み重ねを教師側が繰り返し確認していくこと、友達の意見に対する児童の反応の受け取り方など、細かい指導についての工夫が求められた。

上所小学校 志田倫明先生からの御指導

志田先生からは、「単元を通しての見通しと学習の軸を明確にもつことの重要性」が強調された。どの授業においても単発的な活動で終わらせるのではなく、単元を通して「単元を貫く型」という明確な軸を設定することが大切であるとの指摘をいただいた。そうすることで、子どもの学びが積み重なり、自ら探究していく姿へとつながることが確認された。

今後の展望

算数科の授業を通して、子どもが「言葉にすることで理解を深める」場面が確認できた。今後は、学年や単元を超えて「言葉で考えをつなぐ力」を育てるために、単元全体の見通しを意識した授業設計をさらに工夫していく必要がある。